を遂げたポーランド王国の工業化の成果は、まさに「ポーランドの工業化」として正当に評価されなければならない、というのが著者の最終的な立場である。

第一次大戦後の独立ポーランドへの展望が必ずしも明確でないこと、ウッジの繊維工業に集中する余り王国の他の産業部門との連関が見えにくいこと等、手薄な部分がないわけではないし、民族独立問題へのこだわりをあえて一旦捨象して工業化の進展を注視するというアプローチにも賛否両論あるであろうことが予想される。しかし、本書においてわが国で初めて数量的な裏付けを伴って一九世紀のポーランドの急激な経済発展の様相が明らかとなったことは何よりも貴重であるし、著者のアプローチは日本人が外国研究に携わる際に何をなしうるかという問題についても多くのことを考えさせる。

（A5版　一八二頁　一九八九年一月
日本評論社　三二〇〇円）

（小山　哲　京都大学助手）

福井市編集・発行
『福井市史　資料編別巻
絵図・地図』

地方史誌において、古地図をカラーの口絵や折込みのかたちで収載する試みは、従来とも行なわれてきたし、旧尾張藩に属する幾つかの市をはじめとして、デラックスな別冊村絵図集の類を出している例もすでに少なくない。しかもその間にあって本書は、質量ともに圧巻といえるであろう。復製技術の進歩もさりながら、図像資料見直しの時流を反映しているわけであろうが、このようにゴージャスなプロジェクトを決断された福井市はじめ、監修・編集に関係の各位に敬意を表したい。はじめに本図巻の構成をあらまし紹介しておこう。即ち「監修のことば」（菊地勇次郎）、「凡例」などにつづいて以下のごとく、「古代・中世」を一括し、伝存図の大半が属する近世に関しては、ジャンル別に配列、明治以降の刊図に及ぶという編成である。カッコ内は収録図数で全九九点。「凡例」にもいうように「彩色されている資料は原則としてカラー図版により掲載」、まさに壮観というべきである。その他、各図の所蔵・法量・「図像内容が示す年代」が解説に明記されるほか、巻末にもそれらを総覧するリストが付されている。

1古代・中世（6）　笠島清治・小林健太郎
2国絵図（3）　海道静香
3城下絵図（11）　松原信之
4町絵図（5）　松原
5城郭図・屋敷図（8）　吉田純一・舟沢茂樹
6寺社境内図（5）　八杉利正・野尻修
7村絵図（6）　吉田健・吉田叡
8検地分間図（9）　小林
9浦絵図・漁場図（6）　岡田孝雄
10河川図（5）　吉川博輔
11水利図（7）　吉田叡・吉田健
12道中図（3）　野尻・舟沢
13相論図・境界図（5）　印牧邦雄・野尻
14明治期行政区画図（3）　小林

15市街図（9）　小林
16地形図（5）　林和生
総説（1）　小林
折込付録（2）　松原・小林

「総説」が巻末近くにおかれているのは、市民ないし読者は各自、身近な図から見始められたいという趣旨でもあろうが、先ずこの文章を読むのも一法だろう。これは、「本書に収録した絵図・地図資料と、わが国における地図（絵図）の歴史との関連」を説くことを主眼として書かれているので、各章の扉に記されたジャンル別のイントロダクションとともに、各図の意味内容をより広いスコープの中で捉えるのに役立つ。いずれも一たん見入れば見飽きない地図ばかりだが、紙数の都合もあって到底すべてにふれるわけにはいかない。以下、ほぼ目次順に、若干、目にとまった事どもについてコメントさせていただくことにしたい。

冒頭の第1章は道守村・糞置村の開田図といった全国的にも超一級の史料をもって飾られているのだが、いまに遺る奈良時代の開田図二一葉中四点が当市域に関わるもので、これが豊富な国絵図や城下絵図の保有とともに、市史に絵図の別巻を編もうというアイディアを触発させた一因ではなかろうかなどという思いをよぶ。これらの絵図が、大量の東大寺領荘園文書と相まって、古代社会経済史の研究を前進させたことは周知のところである。「大乗院寺社雑事記」に挿入された「河口・坪江庄関係略図」もまた貴重な中世絵図として知られる。解説には各絵図に関連の文書が同市史の『資料編2』などより引かれ、また当該地域の地形図・空中写真、そのほか解読のための参考図などが援用されている（これらの配慮は以下の各章を通じてみられる）。次の章では、全国的にも一一例しか伝えられていない慶長国絵図がまず目をひくが、「総説」によれば松平文庫には正保・元禄・天保の幕府撰図の控えをはじめ、一六葉の国絵図を蔵するというから全く素晴しい。そのうち本章には「貞享の大法」に先立って幕府が提出を命じた同二年図や、藩独自に作成された元文期の図が収められており、右記の全国一斉の調進図に比し、ユニークな点を備えている。ところで、因みに貞享国絵図は約四メートル四方、藩当局の作成にかかる絵図は巨大で、全容を一望すべくひろげることすら容易でないものが少なくない。それがA四判に復製されていることが、研究者にも一般読者にも有難いわけだが、その上、縮小のデメリットを補うため、図上の注記の文字を読み得る程度に拡大した部分図が用意されていて、一段と便利である。——そしてこの全体図と部分図の組合せという工夫は、全巻を通じ随所で活用されているのである。

城下絵図の伝存に関しても、福井は卓絶した旧城下の一つである。各図解説に先立って「福井城下絵図の伝来」や「調製期」を説く節も自ら内容濃密となる。この分野については私もかねがね関心を有し、松平文庫のそれに関しても調査報告をしているので、ここでは筆を節したいと思う。（「福井城下絵図史について」『歴史地理研究と都市研究』上巻、一九七八）。実はこの拙稿は主として松原氏の執筆された『松平文庫目録』（一九六八）に導かれたものではあったが、いささかは新しい解釈をつけ加えたつもりである。今般の本章の解説は、『目録』当時に比べると幾つかの点で補訂が加わっているが、なお一、二注文させていただきたい点がないわけではない。一つは図11「福居城下絵図」に関してである。

氏は景観年次については正保期としつつも、作成時期はその裏書の年紀から「貞享二丑年十二月」としているが、金坂清則氏の指摘どおり、これは裏書を書き加えた年月日であろうことが、件の裏書の文言からもよみとれる(『福井県史　資料編16上　絵図・地図』近刊)。この点、松原氏が図12について、裏書に「寛文九乙酉年四月十五日」と寛文の大火当日の日付を有しながらも、実はその一〇年前の万治二年の大火時の図であることを発見されたことに相通ずるものがある。つまり金坂氏は図11は、作成年次もまた正保であり、これこそかの「正保城絵図」の控え図だと推定するのである。一方、松原氏は図13の正徳三年図の解説の中で、その下図と考えられる芦田文庫図に関し、裏書のごとき貞享二年図ではなく「正保期調製の城下絵図が基本とされた」と想定している。とすれば、件の「基本とされた」図とは、スケールからみても、多分、図11と同類の正保城絵図の下図だったのであろう。いま一つの注文は用語に関してである。氏は右の引用個所にもあらわれているように、ベースマップとでもすべき場合に「基本図」という語をしきりに用いておられるが、これはすでに国土地理院の「国土基本図」のごとき使われ方が一般的になっていると思うので避けられた方が無難であろう。また「図法様式」という語も方々にみられるが、収録図の裏書などにおいても「先規の図式に遵う」という文言もあるくらいだから、これに遵われた方がよかった。なお、例えば右のように『市史』は近刊の『県史』の絵図編と併せみることによって一層有用になるはずと思われるが、本書では貞享二年図、『県史』では正徳四年図と、ほとんど同趣好の絵図が選ばれていることは勿体ない感じがする(ちなみに、正倉院の二点の開田図や、慶長国絵図、後にふれる「三大川沿革図」なども、両書で重複して収録されている)。

さて次章には一一の町組に編成されていた城下の町方のうちの一つ「神宮寺組」について、各屋敷の間口・奥行および地主名を記した絵図を一グループに括るのは編者の自由であるが、「町絵図」というネーミングは如何であろうか。一般に町絵図とは、宿場町図・港町図・門前町図などの総称として、いわば都市図と同義に用いられており、この意味では城下絵図もこれに含めうる概念である。この点、「町絵図をこの(第4章の)ように規定する」(六七頁)よりも、総論の立場(二五一～二五二頁)の方が穏当であろう。因みに第5章の中で扱うか否かは別にしても、貞享二年および正徳四年の城下絵図作成に関わる「御城下図別記」所載図群も、通常は「屋敷図」に属するであろう。次いで「7村絵図」としては五点が採られているが、領主の代替りや所領替えに際して提出された一般図(ジェネラル・マップ)としての村絵図であるためか、地方知行や「御林・定納山」の別を示すもの、あるいは民間信仰に関する情報まで盛った他藩のケースに比べると、やや物足りない。章を別にたてた「浦絵図・漁場図」「水利図」等々、いわば主題図(テーマティック・マップ)的な広義の村絵図の方に、面白いものが多い。例えば「検地分間図」の章では、壬申地券作成前後の見取り図的な村絵図から実測に基づく地籍図への歩みが追跡されており、第13章では、藩政初期に藩主が城下の豪商に与えた朱印地の「境内図」や幕府評定所の裁決を仰いだ池水の用益権に関する元禄年間の「相論図」などが興味をひく。また「河川図」の中には領内の三

大河について、上流より下流までを各一帖に連続的に描いた「沿革図」が素晴しく、足羽川と城下との関わり等々、部分地域についても貴重な情報を載せている。また参覲交代のコースなどを、屏風や絵巻に仕立てた作品は幾つかの藩に伝えられているが、当藩の江戸や京坂への「道中図」も、眺めていると楽しくなる。

最後の二章は「市街図」と「地形図」だが、ここで市民にとっても比較的なじみが深いと思われる前者を例にとって、本書における採録図の選定がいかに周到な配慮のもとに行なわれているかをうかがっておくことにしよう。第15章には図78以下の七点、別に付録として昭和八年図が採られている。当市にとって最も早い市街図は明治十九年図なのだが、図78（同二十四年刊）はこれをベースとしている上に、二十二年の市制施行直後の状況を写しているという点で選ばれたのである。朱線で町界を入れ、「町名新旧比較表」を載せる（もっとも新町名の成立は明治九年に遡る）。本丸・二ノ丸・三ノ丸の郭線はもとより百間堀も未だ残る一方、大身の屋敷地区だった佐佳枝上町に県庁・郡役場・裁判所など新政府の行政機関や医学所・師範校なども見出せる。次の図79は国鉄北陸線や民営鉄道の駅の開業をはじめとする都市施設の充実、伝統的な絹機業の近代工業化による発展相を載せた大正十一年図、さらに「人絹王国」の中枢としての最盛期に、折からの陸軍特別大演習を記念して出された昭和八年の市街図が付録として復製されている。図80の鳥瞰図も同じくこの時のものだが、図中に克明に描かれた戦災・震災前の都市施設を一つ一つ拾うまでもなく、一目でそれとわかる〈吉田初三郎の世界〉を前にしただけで、オールド市民は古きよき時代への懐旧の情を禁じ得ぬはずである。ついで図81は昭和四年の都市計画区域、同七年の街路計画、十二年に認可された用途別地域指定が総合的に表現された図で、戦前における当市の都市計画の全容を示す。これに対し図82は二十一年の戦災復興計画図で、当時の市街のほぼ全域が、戦災区域として赤で囲われていること、およびこれを機に大胆に広幅員の直線道路が引かれているのが印象的である。もっとも、いずれも都市計画図の常として、そのまま実現されたわけではないが。図84（二十四年）は前年の大地震の「災をもって福とし」、旧城下町の形態を一掃し、近代都市への変貌を遂げることになった時期の図である。また図83は、この大地震後間もなくアメリカ軍が撮影した航空写真であり、地図とはまた異なった迫力をもっている。なお参考として昭和五十年および最新（六十二年）の国土地理院の空中写真も添えられている。また「地形図に歴史を読む」ことは必ずしも目新しい試みではないが、ラストの第16章では、明治三十五年に第九師団によって作成された二万分の一迅速測図をはじめ、各期の五万分の一図が配列され、まことに適切な読図が加えられている。

おわりに望蜀の言を一つ。巻末に「主要参考文献」として十数点の単行本があげられているとはいえ、「解説にはこれまでの研究成果が援用されているが、本書の性質上（略）、逐一出所を示すことをしなかった」（「凡例」、「総説」あとがき）点は、著作権について良心的であろうとしている時節柄、悔しまれる。本書を繙こうとするほどの人人にとって、参照文献の的確な注記は決して煩わしいものではなかったはずである。

（A4判　二七八頁　福井市　八一〇〇円）

（矢守一彦　大阪大学教授）